



高橋山

大龍寺

はじめに

平成五年開祖四百年を迎えました高橋山大龍寺は、昭和五十五年庫裡の新築に始まり鐘樓そして本堂の大改築、堂内荘嚴の改修と堂宇の修復は一応終わり、平成六年漆間芳彰上人が新しく住職に就かれました。これを機会に高橋山大龍寺の沿革推移と堂内佛像等を御紹介致します。



『寛保二(戌)年十月吉日 融誉代 細工 井上源助』と記されています。
第五代融誉上人の代で、今から約250年前のものです。

もくじ

一、高橋山大龍寺の開山

——いつ 誰が どこで——

二、寺院の移転

——現在の所に移されたのはいつ頃か——

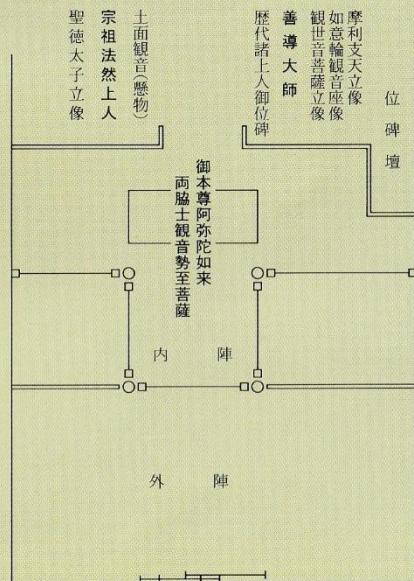
三、本堂はじめ他の建造物の沿革

——本堂・鐘樓・庫裡 他——

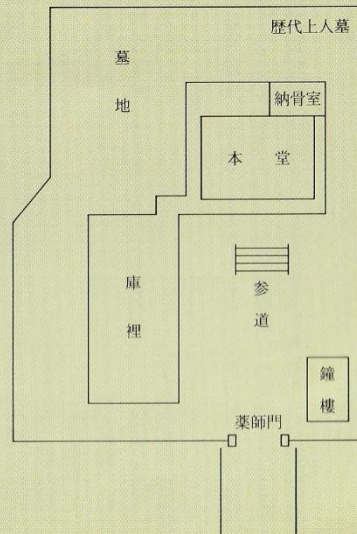
四、歴代の住職

——大龍寺四百年を支えた住職——

本堂内安置図



境内配置図



一、高橋山大龍寺の開山

——いつ 誰が どこで——

文禄二（巳）年（一五九三）ですから今からちょうど四百年前に、嶽
譽光春大徳が、浄土宗総本山知恩院の末寺として開山されました。その
年には豊臣秀頼が生まれているし、その後文禄十年に徳川家康が知恩院
を永代の菩提所と定めています。嶽譽光春大徳は慶安三（寛）年に入寂
されていますので五十七年間の住職であったようです。場所はどこだっ
たのかというと、今の木津小学校（校地）の所です。現在の地に移った
ことは次の項で考えてみることにしましょう。

（注）小寺（村）という地名の出てくる年代や当時の水害等の様子か
ら想像に苦しむ点が多くあります。





涅槃図

『正徳二（辰）年 観誓代』と記されています。
今から約二八〇年前になり、畳三丈分程の立派なものです。



棟札

『甲文化十一年 奉建立本堂 戊十月十四日迎誓代
大龍寺大工 小兵衛・三良兵衛・莊七』と記されています。
現本堂が建立された年で、今から約一八〇年前です。

二、寺院の移転

——現在の所に移されたのはいつ頃か——

寺の記録（寺史）では『三代住職の観誓代』と書かれていますが、その年代・年号に就いてははっきりしていません。そこで次に挙げる事柄などから推定して約三三二、三十年前の寛文年間と考えられます。

〈理由の参考〉

ア、観誓上人は六十年の長い間寺運の隆昌に尽力され、寺史にも『中興』と書かれています。

イ、五郎兵衛地所を寄附〔承應二年（一六五三）

ウ、梅谷の心楽寺開基〔延宝五年（一六七七）

エ、梵鐘の鑄造〔延宝七年（一六七九）

オ、鐘樓の建立〔元禄九年（一六九六）

カ、本堂（本尊）と庫裡のこと…次の第三項参照

※寺史にも本尊と創設期の本堂、そして庫裡についての記録が全く見当りません。

キ、その他

。梅谷心楽寺の阿弥陀如来像のこと
。当時の木津川洪水（水害）の様子

三、本堂はじめ他の建造物の沿革

——本堂・鐘樓・庫裡 他——

寺院はご本尊と本堂・庫裡そして鐘樓が必要でしょうがわけても本堂はその中心です。現在の本堂の起工（新初式）は文化八年で、三年後の文化十一年に上棟されています。今から百八十年前のことです。そして本堂の供養式が十一年後の文政八年にとり行われているのです。

落慶法要とは書いていないが起工から十余年を要したのは、とても困難な大事業であったことを物語っています。

（注）（1）鬼瓦銘「干時文化拾二年乙亥歲林鐘細工瓦師利兵衛

（2）棟札

次に鐘樓ですが（前二項参照）天保十二年に現在の所に移し修理されています。寺史に『從來本堂脇末申ノ角ニ有リシヲ五尺築上ケ石垣ヲ為シテ修繕ス』と書かれています。今から百五十三年前で、その鐘樓が昭和五十六年に改築されたのです。繰返しになりますが梵鐘ぼんしょうの年令は三百十五才です。

次に庫裡の移り変わりますが寺史に、四代誠營上人は『：後門造宮、表門・土蔵・長屋ヲ建立ス』との記述がある以外に築造や修繕の記事はありません。昭和五十五、六年の新築以前の建物について『庫裡は切妻造四方下屋庇付・各本瓦葺で軒は塗込とし、一見奈良に近い当地の町屋の造りに似る。江戸時代末頃の建築と見られる』との資料があります。

（注）「京都の社寺建築（山城篇）」

この前項と後の資料を照合してみると少なくとも一世紀以上の開きがあることに注目されます。

なお参考資料として、天保十一年秋の表門修繕の記事「右ハ從來大道地面ト同シキ処、本堂前迄同一、三尺築キ上ケ修繕ス」とあります。



納骨室

行正文海上人念願かない、この度整備されました。戦後より、現在まで約150体安置されています。

四、歴代の住職

——大龍寺四百年を支えた住職——

宗教・宗派そして信仰の問題。さらに寺院の存在意義とか今後の課題さてはあるべき姿等々の論議はありましようが、兎に角大龍寺四百年の歴史は尊く、これを支えた歴代住職のことについて顧みることにしまし
よう。

。開山 嶽譽光春大徳

大龍寺初期(五十七年間在任)の寺づくりをされました。：第一項参照

。二代 袋譽智感上人

二か年間に在任

。三代中興 観譽智春上人

六十年間にわたる在任で、前記(第二項参照)のとおり現在地への移転をはかり、ほぼ現況に近い規模の寺づくりに尽力され、寺史に中興の祖と記されています。さらに延宝五年梅谷の心楽寺を開かれました。

。四代 誠譽観^げ岡上人

六十三才で入寂されていますが既に記したように、表・裏の門・土蔵・長屋を建立されました。

。五代 融譽虎的上人

五十二年間の在任 七十四才で入寂

。六代 晋譽岩的上人

十八年間の在任 六十四才で入寂

。七代 迎譽智^{しや}的上人

三十一才で寺に入られ、前記(第三項)にもあるとおり、現在^{いま}の本堂を再建され、延宝八年の供養式の翌年七十三才で入寂されています。なお弟子の深蓮社堅譽玄心上人は和泉式部地藏堂を中興されました。

。八代から十七代まで

この間六十七年ですが寺史の記事も乏しく御上人名のみ記述させて頂きます。

八代 相譽現的上人

九代 中譽大誠上人

十代 載譽運誠上人

十一代 中譽大誠上人(再住)

十二代 性譽謙誠上人

十三代 曜譽榮林上人

十四代 達譽賢明上人

十五代 賢譽栄存上人

十六代 嶺譽静学上人

十七代 明譽賢慧上人

。十八代 明譽賢慧上人

久世郡上津屋村の人、飯岡西方寺住職から大龍寺の住職となられました。明治二十六年七月で今から百年前のことです。明治三十四年祠堂の方法を確定され祠堂金の基礎を作られたり、明治四十二年、寺の沿革について調査しいわゆる「寺史」をまとめられました。昭和八年五月入寂。

。十九代 憲譽文海上人

昭和八年入山され、平成六年一月退山されました。在任、六十一年の長きにわたり、終始温厚・誠実。檀信徒の信望篤く、常に寺運の繁栄と伽藍の保守につとめられ今日に到りました。殊に戦中戦後の困難期克服に尽力され、幾星霜風雨に耐え抜いた堂樓の手入れがさし迫りつつあった中、昭和五十五年以來十年余の間に、庫裏・鐘樓、そして本堂等の大改築大改修事業に尽粹されこの度目出度く完成落慶の日を迎えることとなりました。尚また五重相伝は数度に及び宗旨の教化布教に尽くされた足跡は永く後世に顕彰されるものです。

あとがき

『私は福岡市の西の方で、玄海灘の白い波頭が見える村で生まれ縁あって京都の学校に入りましてんや。』寒い朝お詣りいただいた後での文海老僧のしみじみとしたお話し。老眼の奥に幼ない頃の思い出と田舎の風景が美しく写し出されているようでした。

大龍寺四百年の跡をまとめてみる動機の一つとなったエピソードです。

この度昔の姿そのままにより立派に再現された本堂は、傍を流れる井関川の岸が歴史の散歩道に生まれ変わる時一層趣を深めることでしょう。

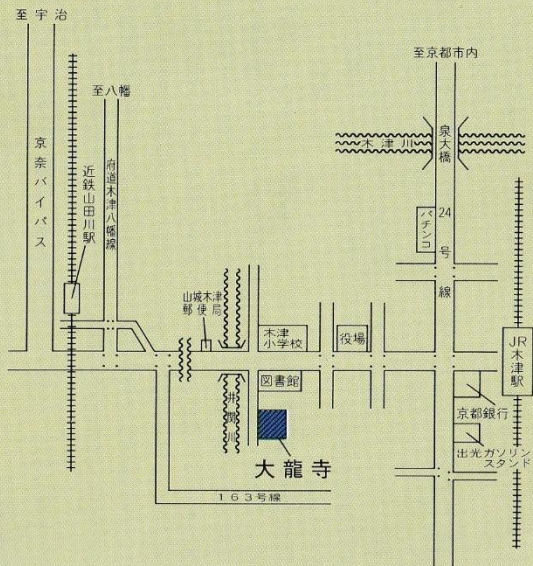
大龍寺が百年、二百年たっても無事平穏でありますよう祈念してあと書とします。

〒619-02

京都府相楽郡木津町内垣外四三番地

高橋山 大龍寺

TEL 〇七 七四七—二—〇四六二



・JR木津駅より徒歩約10分。近鉄山田川駅よりバス又は車で7分です。